

子どもと(6)

九月・外へ

清水 光子

まだ残暑が厳しく寝苦しい夜があけた九月の初めの朝、驚く。空の青さに。そして樹々の影、ビルの形をうつした影が何とくつきりとしているのに！

「秋が来た。晴れた日、澄んだ空気、木の実草の実の豊熟、及び我等と子どもとの健康をもってよき秋が来た。」と倉橋惣三先生は園丁雑感の「秋が来た」の冒頭に言っておられる。そして「ある朝の急に引きしまった爽かさに、夏の子のゆるんだところが蘇る。どんなよりとうたた寝でもしていたような健康が、むくむくと目醒めて来る。全身の筋肉がすこやかなる緊張を増し加えて、行くに広き野、攀ずるに高き山をもとめて来る。(中略)畢竟、秋は戸外の季である。さらに、おのが健康をして自ら戸外に味わい楽しむべき季

節である。」と。その初秋九月である。

わくわくと胸躍らせて新学期を迎える保育者の、期待にみちた思いは久し振りに逢うあの子、この子の顔、表情、姿、うごき、声のどんなになったか、にある。そして、始まる新学期、「おはよう」と飛び込んで来て、「ねえ、ねえ」と話したい事が一ぱいの子、「私の顔黒い?」「ええ、とても黒い!」「ぼく、大きくなったでしょ?」とうれしげに保育者と背くらべをする子があると思うと、休み中何かあって浮かない顔があったりもする。成長の喜びは保育者、親はもとより、子ども自身大きく深い感動である。ただ、私はまたしても表に表われた姿をみて成長とすぐに喜んでよいのかどうかを疑うことがある。

四月に入園した四歳児のA君は、お母さんから離れ難くもなく、ごく静かな存在であって問題らしいこともなかったが、担任は何かもう一つ気がかりだった。自信なげで、砂場で遊んでいて使っているシャベルを友だちに持って行かれても黙っており、砂遊びをやめてしまったりする。そのA君が、九月になったら急に、目がさめてエンジンがかかったように、朝登園するなり砂場へ突進、はだしになって、何と、「オイ!」などと友達を誘っている。ほんとによかったなと嬉しく、見守っていいこうと思う。が、一方H子はお休みに入ると間もなく弟が誕生したので、数十キロ離れた祖父母の家(田園地帯)で過ごし、九月に入るまぎわに父母の許に帰って来た。そのことは夏休み前から保育者もきかされていたし、便りには「元気で、自然の中で伸び伸びと遊んでいます。」と知らされていたのだが、新学期になったら、一学期にあんなにおりこうで、物わかりがよかったのに急にひど

く甘えん坊になり、友だちにいじわるをすることがある。ああ、やっばり!と思い、ここは暖かく気長に見守るしかない、甘えは或る程度受け入れて、日子がさぞ心で戦っているだろう壁を乗り越えるのに、精一杯力を貸さねば、と思うのである。九月はこうして一日一日、日が短かくなって秋分の日になる。秋祭りがあり、運動会がある。敬老の日にはお年よりを慰める行事がある。そわそわと、ざわざわと行事に追われて、親も、保育者も子どもをまき込んであわただしく過ごしてしまわないようにと、いつも思うのだが、自然はそんなとき、ハッと足許をみつめないではすまされない試練をしてよこすようである。九月に日本に多い台風の襲来がそれ。子ども達はいつも歩き慣れている道の街路樹が無残になぎ倒され、まだ黄葉の時期でもないのに広葉樹の葉がむしり取られている、嵐の収まった朝、雨風のすさまじい音に母にすがりつき、おびえおのいた昨夜だったのが、朝あけてみれば空は青く澄みわたって高い。子ども心に何とも大いなるものの力に畏敬のようなものを感じたことであった。

四月から転入園した五歳のY子ちゃんは相変わらずことばが少い。保育者のことばかけにも必要以上の答えはない。欲しい物も、これと言うだけなので、できるだけことばを引き出して話すようにしむけるのだが、なかなか思うようにいかない。かと言って幼稚園に來たがらないのではなく、運動会にと考えている遊戯のレコードが鳴り、保育者が数人の子ども達と輪を作っておどり始めると、ごくすらりと輪にはいっておどり、友だちと手をつないで、目を見交している。これでいいのか? と思い、とにかくあせらずに保育者が

つねに近くにいるように、と心掛けていた九月の或る日、ジャングルジムがたまたま誰もいなかった。そこにY子が独りで登って、てっぺんに腰掛けて空をみているではないか！私はと胸を打たれた気がして、ゆっくりとジャングルジムに登り、黙ってY子の傍に腰かけた。二人ともただそうして、どの位の時間か、多分二〜三分だったろう。「先生、あの雲、兎さんみたい！」と指さしたのは、ふわりと浮かんだ白い雲だった。青い青い空にまっ白な、「あら、ほんと！」兎みたいな雲が浮かんでごくゆったりと動いている。彼女の目が私の目を捉えて笑っているのをみて、我が目のうるみを恥じたことであった。高鬼の男の子達が馳け登ってくるのを機に二人は降りて、何となく手をつないで保育室に入ったのである。そんなことがあってから、時々肩や背をたたかれて、みるとY子ちゃん的笑顔があつて、それも友だちと一緒にあつて、私はひそやかな安堵感で充たされたことである。

古い手紙を整理していたら、後輩から、二学期の準備に登園している様子を知らせて来ているのがみつかった。「園庭は雑草で一ぱいです！まるでジャングルみたい。夏休み前にほんのポツポツだった草がまあ、よくもこう繁ったものだと感じました。でも、私たち、草取りはしません。子ども達を迎える最高の贈り物なんですもの。」私はあらためて彼女達、その園の先生達の子どもへの心を感心し、倉橋惣三先生の「夏休み後」の文章を思い出した。まさにびつたりだ、と。ガッパ見付けた草の中……。の倉橋先生作の童謡

がつい口に出てしまった。

しづかなる 力満ちゆき ぼった飛び

加藤楸邨

それにしても、今は都会ばかりでなく地方でもこのような原っぱがなくなってしまつて、きれいに整えられた芝生（ならまだしも）アスファルトの庭の片隅に花だん、というのが一般、普通なのではないかと悲しい。「緑をふやそう、身近な自然を大切に。」と叫びながら、道路整備や宅地開発造成などで緑を失くしている矛盾だらけな環境整備。

九月、秋分の日が過ぎると目に見えて日照時間が少くなる。秋の日はつるべ落としという。夕焼が美しいとみる間に星が（見えることが少くなったとはいえ）輝き出す。自然は春、夏と生きとしいけるものの成長発展に懸命になり、今、秋、充実の秋がはじまっている。栗のいがは日に日に大きく色づきはじめる。梨やぶどうが実り、ふくらむ。嵐のあと雑木林にまだ青いドングリがころがっていたりする。そして涼しくなったな、と思つた宵、軒下からこおろぎの音がきかれて、まあ、よく生き残ってくれたものよとありがたくなる。

こおろぎの この一徹の貌を見よ

山口青邨

私達の子ども達は、この充実の秋を自然の一員として楽しむわけなのだ。手製のおみこしを大ぜいでかついで、祭はやしの音楽をバックに運動会の演しものにするなんて、ほんとおもしろく、うれしい。鎮守の森のほの暗い中での、夜店を照らすガス燈の匂いのなつかしさ、など昔々のことであるが、今の子どもたちにも、素朴な人間のうぶな、どこか暖かく、しかも生命力に満ちた何かを、少しでも残しておきたいと思ってしまう。お月見というのも通り一遍の行事でなく、科学をふりまわさないロマンティックに楽しめないものか、これは家庭でこそやってほしい行事だと思ふのだが。

月天心 貧しき町を 通りけり

与謝蕪村

ほどなくとも、である。

子ども達と蒔き、育て、夏中次々咲かせた朝顔の花もめっきり小さくなった。

朝顔の 紺のかなたの 月日かな

石田波郷

青という色は天上的な色で、限りなく人の心を非日常の世界へ誘う力をもつ。と詩人大岡信氏のこの句の解説にある。空の青さにも通じるような気がする。

斯くしつ 遊び飲みこそ 草木すら 春は生いつつ 秋は散りゆく 大伴坂上郎女

萬葉の頃と二十一世紀間近な今と、人の心の自然との関わりにどんな違いがあるだろうかとしみじみ訝しむ。

天つ星 路も宿りも ありながら 空に浮きても 思ほゆるかな 菅原道真

千年前の科学的でもあった知識人が、何と無邪気な感じ方をしたのか、ほほえましくなる。ともあれ、子ども達と日々、秋を楽しむことに精を出そう！

(音羽幼稚園)

